審査の結果の要旨

氏名　野々村淑子

本研究は、19 世紀前半期のアメリカ合衆国において家庭教育書・育児書を含む「家庭的著述(domestic literature)」が氾濫し、そこで愛あふれる母の子育て役割がかつてないほどに言説化され礼賛され強調された社会的現象を対象として、その歴史的性格を解明しようとしたものである。

そのために、本研究は、大きくは二つの解明作業で構成されている。一つは、19 世紀前半期アメリカにおける母礼賛現象が歴史的に新しいものであることを、欧米それぞれの女性に対する助言書類の歴史の中で検証し分析すること(第二章)。二つには、19 世紀前半期アメリカの母礼賛言説を構成する史料群の中に踏み込んでそこでの言説過程を具体的に分析することである。そのさい著者は、「家庭的著述」の著者および想定されている読者の性別により言説過程に差異が見られることに特に着目している(第三章から第七章)。

これまでの先行研究では、19 世紀前半期アメリカの母礼賛現象に関しては、その新しさが言及はされても、実際にそれ以前の女性に対する助言書類の歴史の中で書誌的に検証・分析されることはなかった。また、「家庭的著述」を無矛盾の一体的観念とみなしてその中にみられる特徴的な言説を繋ぎ合わせて時代の動向的特徴と対応させるにとどまる傾向にあり、母礼賛言説そのものの内部に立ち入ってそこでの言説過程の差異を分析することもなかった。その点で、これに対して上述のような解明作業により、「家庭的著述」研究に以下で述べるような新たな視野を拓いた本研究の意義は大きい。

本論文において新たに明らかにされた主要な知見は、次のように整理される。まず第一に、19 世紀前半期アメリカにおいて母性愛溢れる母であることが女性の人生にとって至上の価値だという言説が氾濫したのは、欧米の女性に対する助言書類の歴史上質的にも量的にも新しいものだということが、書誌的に明らかにされたことである。そのさい、これまで 18 世紀後半期に浸透し 19 世紀の母礼賛現象を先導したとされていた「共和国の母」観念に関しても、これが 18 世紀後半期に浸透せずまた 19 世紀においても女性の言説の中で疎遠な要素であったことが論証されている。第二に、著者が女性である「家庭的著述」には、母性愛溢れる母であることを自分の人生として具体的に引き受けるという点で逡巡が顕著であり、それを自己にも読者である女性(著者が女性の場合は読者にも女性が想定されていた)にも納得させるために言説上に「ゆらぎ」が生じさまざまなレトリックが駆使されあるいは抽象化されることになったことを明らかにしたことである。これに対し、男性著者の場合、こと母観念に関しては「ゆらぎ」は見られず、また男性読者向けの家庭教育論・育児論は版を重ねることがなかったことも明らかにされている。第一章での先行諸研究のレヴューも的確かつ詳細になされている。

社会的要因との関連も含めた構造化という点で未だ不十分性を残しているとはいえ、しかし以上のように、本論文は、19 世紀前半期アメリカの母礼賛言説研究に新たな視野を拓き、とくにその歴史的に新しい母観念に対する女性の言説の中での「ゆらぎ」を提示し得た点で、十分に学術的に大きな意味をもつものと評価される。よって、博士(教育学)の学位論文として十分優れたものと認められる。